

## 寮母は宝

わが山里の夜空は神秘をこめて輝いている。仰ぎ見る星たちにまじるいとも小さい星の一つ、僭越の極みとは知りつつも、わが任運荘をなぞらえたくなる。「いつも乾いているおむつのある」里にと憧れをこめて。

乾いたおむつを求め続けて20年。それを受けつぎ担い続ける寮母たち。寮母は任運荘の中心。

家の中心は母。母の仕事はきりのない雑事。人が生存する所には雑事が群生する。だから雑事とは重要事の別名といってよい。その処理は家事という名で一括されるが、肉体労働と精神労働の両面が際限なく続く。寮母の仕事もそれと同じ心身両面の労働である。

ひとがひとを直接的に世話する仕事、それは教育、医療、福祉の職であるが、心をぬきにしては成立しない。心ない仕事ぶりではひとへの害悪でしかない。寮母職は排泄物に汚れるきつい仕事であり、しかも優しさを必須条件とする高度の精神労働である。ひとの傷みをわが傷みと感ずるのでなければならぬ。いったい、こんな職がほかにあるだろうか。ない。

ひとは老い衰える。そこに介護が絶対的に必要とされる。ひとの一番重要な終わりの段階で介護が登場してくる。家族に頼るか、それを職とする他人にゆだねるかの

違いはあろうとも。

家庭では母に対しては皆の愛がある。尊敬と感謝で十分に報われる。老人ホームの寮母にそれはない。愛も感謝もない。すべて人間の愛は相互作用で育てられ深められ、清められていく。一方的では育ち難く、やがて枯渇する。それでもその枯渇に耐えているのが寮母である。それだけではない。試しに寮母さんの腕を見よう。打身の黒ずみや引つかかれた生傷を発見するであろう。おむつ替えの時に受けた傷である。いわれもない受難にも耐えねばならないのが寮母である。

「世界にわが母にまさる母はなし」。わが母はすべてそういう存在である。母は宝、宝以上のもの。その母代わりが寮母だから、寮母は宝である。施設運営の唯一の鍵は「寮母は宝」と信ずるか信じないかである。

母を雑役と思う人はいない。しかし、寮母をホームの雑役係りと見る人は少なくない。そんな視線のある所によいホームは絶対存在しない。

では宝とすることとはどうすることか。まず、ホームで各職種が寮母職に協力を集中することである。寮母は支配されてはならない。

先に寮母職は暴力受難を運命と云った。寮母は暴力から絶対的に守ってやらねばならない。でなければ

ば、宝なんて空念仏のゴマカシにすぎない。守るのは管理者である。暴力完全否定の態度を貫かねばならない。自分は何もしないで、安全な場所に身を置いて、寮母には「受容」を説くことをやめねばならない。自分が受容できることしか寮母に受容を求めてはならない。管理者だけではない、全職員がそうでなければならぬ。利用者も含めてホーム全体が暴力否定に徹しなければならぬ。

おむつ替えなどの無防衛をねらって寮母に打撃を加える。それは極度のぼけ症状か異常性格のなせるもので、どうしようもない、むしろそうせざるをえない心の内なる原因を知る努力のなさが問題だと、えせ受容論者は言う。言うことなら何とでも言える。右の頬を打たれて左の頬を出す人の言葉なら別だが。

自分が受容できることしか、ひとに受容を説くべきでない。福祉現場は安易な受容論が多すぎる。

平穩に明け暮れしているように見える施設風景の裡に、暴力の芽はひそんでいる。人間が社会をなす所必ず暴力は存在し根絶することはない。だから、ホーム内では芽のうちにつみとりつみとりしなければならぬ。

別の声が聞こえてくる。お年よりの暴力暴言はしれている。指導員や寮母のそれの方がはるかに暴力的で、お年よりは日々、恐怖と絶望に追いたてられていると。施設によりけりとはいえ、直接、間接に聞くその声はたし

かに高い。お年よりの頬の黒ずみが一週間も消えなかつた。閉じこめ、しぼりつけは日常茶飯事。水を求めると「死にやせん」とどなられ、おむつを訴えても「まだ時間がきてない」かく暴力暴言はホームに満ちている。寮母休憩時間はとうに過ぎていくのに、休憩室からの談笑は廊下に響いている。園長は私に言っていた。「見て下さい。職員が楽しくしていれば、園内はうまくいっている証拠ですよ」。私の経験では、職員が楽しければお年よりは苦渋の中で呻吟している。

利用者からされるものであろうと、寮母が加えるものであろうと、暴力の恨は一つ。暴力はびこる土壌も一つ。施設長にしてこのことに気付かないとすれば、彼こそ暴力協力者である。暴言暴力を見ても見ぬふりして、保身と怠惰に漬かっている姿を、私は彼らに見る。

施設責任者は最も現場人でなければならぬ。現場に出るがよい。現場は問題と教訓とあなたが為すべき課題とに満ちている。

寮母は現場人だから宝である。悲しいかな、現場の真只中において現場にいることを知らない寮母の群が存在するのである。暴言暴行寮母がその代表であることは言うまでもないが、現場自覚のないまま寮母職をふさいでいる。任運荘の現場とは、人手をかりねば生きられないお年よりが大声もあげないで眼で訴え続けている必死の場である。良寛の「なぐさめ給へ朝な夕なに」の歌の

ように、ほんの少しのなぐさめだけでよい、それが必要とされている場である。

場の自覚なき寮母は寮母ではない。柔和な眼ざしのできない者は寮母ではない。ほほえみのない者(案外そんな女性がいるのである)は急ぎこころを去るがよい。おむつを替える指手に自然と心がこもるのである。それが分からぬ寮母は失格、本人のためにも利用者のためにも他に転ずるがよい。求められる寮母の自覚とは、畢竟、わが人間性の自覚である。寮母職はすぐれて精神性が求められている。

本書に冒頭の序文を寄せられた永杉喜輔先生の言葉。「福祉をやっている人はまず自分を鍛えるということが非常に重要になってくる。自分自身が人間的向上をめざしてゆけば、よい人間関係を作っていかがるを得なくなるのです。自分がしゃんとしないと、よい関係はできっこない。よい職場関係をつくるには、自分自身が無限の向上を努力する。それ以外にはない」。

人間的向上とはわが人間性を深め広めることである。人間性とは自分の温かさである。自分にしてほしくないことはひとにもしない優しさ、自分にしてほしいことはひとにもしようという自己課題である。無限の向上を努力するということは、この一事を自分に努めることである。真の自分にかつていくことである。だから、お年よりに尽くすことは、じぶんのためになっているというこ

とを自覚することである。

任運荘の最初の指導員(相談員)三代茂子さんは「任運荘は私の学校」とお年よりに感謝する生涯を貫いている。ひとを介護することは、自分が勉強することに繋がる。自分が人間になりゆく学習であると言っている。寮母の自覚とはその構造である。

ひとがひとを介護する寮母職に就いていて、それが分らないままに過ぎているとすれば、悲しいことではないか。